

内閣府主催シンポジウム「新たな公益活動の芽生えと今後の展望～震災後2年を前にして～」  
パネルディスカッション

事例紹介1

鍋島 英幸 (公財) 三菱商事復興支援財団 副会長  
三菱商事(株) 代表取締役 副社長執行役員

事例紹介2

油井 元太郎 (公社) SWEET TREAT311 理事

ディスカッション

(パネリスト)

鍋島 英幸 (公財) 三菱商事復興支援財団 副会長  
三菱商事(株) 代表取締役 副社長執行役員

油井 元太郎 (公社) SWEET TREAT311 理事

木川 眞 ヤマトホールディングス(株) 代表取締役社長  
ヤマト運輸(株) 取締役会長

黒田 かをり (一財) CSOネットワーク 事務局長・理事

堀田 力 (公財) さわやか福祉財団 理事長

※コーディネーター

【はじめに】

○司会 それでは続きまして、今後の公益活動の発展に向けての課題やその解決方策をテーマに、パネルディスカッションを行います。

これより、パネリストの皆様を御紹介いたします。お名前をお呼びいたしますので、順次ステージに御登壇をお願いいたします。

公益財団法人三菱商事復興支援財団副会長であり三菱商事株式会社代表取締役副社長執行役員でいらっしゃいます鍋島英幸様。

続きまして、公益社団法人SWEET TREAT311理事でいらっしゃいます油井元太郎様。

ヤマトホールディングス株式会社代表取締役社長、並びにヤマト運輸株式会社取締役会長でいらっしゃいます木川眞様。

一般財団法人CSOネットワーク事務局長・理事でいらっしゃいます黒田かをり様。

公益財団法人さわやか福祉財団理事長でいらっしゃいます堀田力様です。

さて、ここからの進行は、コーディネーターとして堀田様をお願いいたします。では、堀田様、よろしくをお願いいたします。

○堀田 よろしく申し上げます。本当に曾野さんの素晴らしいお話で、うっとり聞いておりました。あれだけ素晴らしいお話があったのだから、もうパネルはいいのではないかとも思っておりますけれども、お顔ぶれを拝見しますと、そうそうたる皆様方、これから言うぞという御姿勢でございます。本当に素晴らしい活動をされておりますので、最初に、

それぞれの御活動ぶりを伺いたいと思います。

その後どうなるかは、シナリオはありません。私が忘れたのではなくて、シナリオがないので、どこへ行き着くのかわかりませんが、最後、めでたく、公益法人、一般法人がもっともって元気に、被災地での活躍を含めて公益活動を元気にやろうよと、そういうメッセージを出したいなと思っております。

そういうメッセージでございます。そこへ行き着くように頑張りたいと思いますので、よろしく御協力ください。

ということで、最初に、すばらしい御活動ぶり、御報告をいただくのですね。まずは、三菱商事復興支援財団、鍋島さんから、よろしく申し上げます。

### 【事例紹介1】

○鍋島 三菱商事復興支援財団の鍋島でございます。よろしくお願いいたします。

三菱商事は、震災直後の4月に三菱商事東日本大震災復興支援基金を設立し、被災地への支援活動を行ってまいりましたが、被災地の復興には、水産業や農業など、これまで地域を支えてきた産業を再生させるとともに、新しい産業・雇用を創出していくことが必須であるという思いから、昨年3月に三菱商事復興支援財団を設立し、5月には公益法人の認定をいただきました。

設立・認定に際しましては、内閣府を初め関係者の皆様には大変迅速に御対応いただきました。厚く御礼を申し上げたいと思います。

さて、設立以降、地元の金融機関等の御協力をいただき、これまで8件の支援を決定いたしました。岩手県2件、宮城県5件、そして福島県1件で、支援総額は5億5,000万円、約800人の雇用創出が見込まれております。現在はさらに6件への支援を検討中であり、今後も迅速な支援を継続し、被災地の産業復興、雇用創出に少しでも貢献させていただきたいと考えております。

本日は、最初に、産業復興、雇用創出支援についての具体例を御紹介し、次に、財団のその他の取り組み、そして最後に、復興支援活動を通じて私が感じていることについて申し上げます。

産業復興・雇用創出支援について、3件を御紹介させていただきます。

まず、キャピタルホテル1000の再建支援です。このホテルは陸前高田市の中心部にあるホテルで、皆さんも御存じの「奇跡の一本松」から約500メートルの位置にあります。平成元年に開業いたしましたキャピタルホテルは、高田松原を臨む海際に建ち、市唯一の観光ホテルとしてのみならず、結婚式や同窓会など市民の皆さんが集う地元のシンボルとして愛されていたホテルであります。

3月11日の津波によって、陸前高田市は壊滅的な被害を受け、美しい松林は根こそぎ流され、キャピタルホテルへの津波は4階にまで及びました。このキャピタルホテルの再建は、昨年4月に気仙沼信用金庫さんから要請を受けたものであります。

この写真は気仙沼信用金庫さんの震災直後の写真ではありますが、このように大きな被害を受けられたにもかかわらず、震災直後から、気仙沼市、陸前高田市など地元企業の再建に取り組まれております。

キャピタルホテルの全壊により陸前高田市には宿泊設備がなくなり、復興の大きな障害となっております。また、陸前高田市では、5,000人以上の方々がいまだに仮設住宅に住まわれており、お見舞いの方々が泊まれる場所がありません。また、住民の皆さんが集う場所がなく、いわばコミュニティが失われているという状況でございます。

このようなお話をいただきまして、当財団では、キャピタルホテルの再建が陸前高田市の復興につながるという気仙沼信用金庫さんのお考えに賛同し、再建支援を決定いたしました。

この図はキャピタルホテルへの支援形態をあらわしております。国が建設費の4分の3に当たる4億6,000万円を補助、また、1億5,000万円の融資を行いますが、残りの3億7,000万の運転資金についての補助がなく、最終的に当財団から1億円を出資、気仙沼信用金庫さんから2億7,000万の融資を決定いただきました。

当財団が、融資ではなく、出資といたしましたのは、出資とすることによって、当面、返済などの負担がキャピタルホテルさんに生じないこと、また、キャピタルホテルの皆さんとともに事業再建を目指していこうと考えたからであります。

こちらは調印式の写真です。支援発表後、ツイッターには、これで地元に見舞いに行くことができる、友達に会うことができる、みんなが集まる場所ができるといった多くの声が寄せられまして、皆さんの期待の高さを感じました。

建設予定地の写真です。海から2キロメートル離れた丘の上で、現在、造成工事が進んでおります。

新しいキャピタルホテルは鉄骨3階建てで、総部屋数40、最大80人の宿泊が可能で、今年8月のオープンを目指しています。ホテルの開業に向け、10名の元従業員が再雇用され、地元高校の卒業生6名も新たに採用されます。

次に御紹介するのは気仙沼市の三陸飼料の再建支援であります。震災前、気仙沼市は、皆様御存じのとおり、カツオの水揚げ、あるいはフカヒレの生産量では全国一位という屈指の水産都市でありました。

3月11日の大震災により9,500世帯が被災、1,000名を超える方々が亡くなられ、気仙沼市の漁船の8割以上に当たる3,000隻が失われたほか、38の港は全て沈下、沿岸の多くの水産関連施設が流出いたしました。

この写真は三陸飼料さんの被災直後の写真であります。工場そのものが壊滅的な打撃を受けて、そして、オーナーもお亡くなりになりました。この三陸飼料さんは、気仙沼に水揚げされる魚の処理、加工時に発生する残滓を原料にして畜産飼料を製造する事業者であり、このような下支えの事業がなければ気仙沼の水産業は復活できません。気仙沼信用金庫さんからは、亡くなられたオーナーの妹さんが、何としてもオーナーの意思を継いで三

陸飼料を復活させたいということで、当財団に出資の要請がございました。

この図は三陸飼料さんへの支援形態です。国からの補助金が10億2,000万、公的資金の融資として2億4,000万が決まっていたのですが、それだけでは運転資金等を賄うことができず、当財団で1億円を出資、気仙沼信用金庫さんが2億8,000万の融資を決定されました。

三陸飼料さんは、この支援を受け、年末年始には不休でボイラーの据え付け工事が行われまして、工場はこの1月から稼働しております。従業員7名の方が再雇用されて、4月からは地元高校の卒業生が働くということも決定しております。

三陸飼料の足利喜恵子社長からは、水産業に携わる方々が、三陸飼料が頑張る姿を見て、自分たちも頑張っていこうという気持ちになってきたというお話を伺いました。当財団では、三陸飼料の事業再開が一つのきっかけとなって、地元の水産加工業の事業再開、そして、それが気仙沼の水産業の復興につながっていくことを期待しております。

3番目のケースは、福島県南相馬市での南相馬ソーラー・アグリパークです。この案件は、南相馬の子どもたちを元気づけようと新たに立ち上げられた事業に対する支援であります。

南相馬市は、地震、津波に加えまして原発事故の影響もあり、市の一部はいまだに帰宅が制限されております。南相馬には、震災前、約6,000人の小・中学生が暮らしていましたが、市外に避難した子どもたちも多く、現在は約3,000人にまで減少しております。

こうした状況下、社団法人福島復興ソーラー・アグリ体験交流の会の方から、南相馬の子どもたちを何とか元気にする事業を始めたいというお話をいただき、当財団は、基金として3,000万円の拠出を決めました。

この事業は、南相馬市の全面的な協力を得まして、パイロット事業として太陽光発電所と植物工場を併設した南相馬ソーラー・アグリパークを建設するものであります。子どもたちが集まる場所をつくり、同時に、太陽光発電の仕組みや電気事業者の蓄電を学んだり、最先端の植物工場で体験学習をしてもらおうというものであります。

以上が支援を実行いたしました8案件のうちの3案件でございます。現在さらに6案件を検討しておりますが、地元目線に立ってニーズを直接把握し、また、地元金融機関との連携を深めるために、当財団では、昨年7月から気仙沼市に駐在員を置いております。

次に、三菱商事復興支援財団のその他の取り組みについてお話をしたいと思います。財団は、一昨年4月に100億円で設立いたしました三菱商事東日本大震災復興支援基金の活動を引き継いでおります。被災大学生への奨学金として、延べ1,700名へ合計21億円を給付、また、被災地のために活動するNPO等への助成金として、370件、合計9億円を給付してございまして、引き続き継続してまいります。

また、三菱商事では社員ボランティアの活動も展開しております。2011年4月23日から10月までの半年近く、途切れることなくボランティアを実行してまいりました。活動場所も、仙台から石巻、南三陸、気仙沼、陸前高田と移し、地元のNPOと連携をとりな

がら、現場のニーズに対応できるように活動を行っております。

このボランティア活動は、現在では被災地のニーズに応じて週末に継続して行っておりまして、これまでに約2,000名の社員が参加しております。

それでは、最後になりますが、復興支援活動に取り組む中で私が感じていることについてお話を申し上げたいと思います。

まず、政府には総力を挙げて復興に取り組んでいただきたいと思います。私自身、今月も陸前高田、南三陸、石巻と被災地に入っただけでしたが、安倍新政権への被災地の期待は非常に大きなものがあります。安倍首相は、「被災地の復興なくして日本の再興はない」とおっしゃっていますが、ぜひ政府の総力を挙げた取り組みを実行いただき、一日も早い被災地の産業復興を実現していただきたいと思います。

復興支援を通じて課題として感じていることを3つ申し上げたいと思います。

1点目は、地元目線での国の施策の実施であります。被災自治体におきましてはマンパワーが圧倒的に不足しております。中央省庁から陸前高田市や釜石市に副市長が派遣されている例がありますが、被災者の生活再建や地域の復興に向け、経験を有する中央省庁からのさらなる人材投入が必要だと思います。現場主義を貫き、地元目線に立ってニーズを把握し、中央の施策にぜひ反映していただきたいと考えております。

2点目は、補助金の弾力的な運用であります。被災地の事業者からは、資材費や人件費の高騰等で当初の計画どおりにはいかないケースが出てきている、現場の実情に沿った弾力的な運用を認めてほしいという声を多く聞きます。また、補助金の審査プロセスが複雑であるとか、あるいは審査決定までの時間が非常にかかるという話も聞いております。補助金の弾力的な運用、プロセスのより一層の簡素化、効率化などに取り組んでいただき、この復興の加速化をぜひお願いしたいと思います。

3点目は、NPO等の活用・育成であります。被災地での支援活動で、国や民間企業では対応できない分野で多くのNPO等がきめ細かい活躍をされているということを改めて認識いたしました。そのようなNPO等の多くは資金と人材が不足しております。それが継続的な活動の障害になっているという状況であります。国による一層の後押し、資金と人材が安定的にNPO等に行き渡るような仕組みづくりが不可欠だと思います。

以上、3点申し上げました。

本日は、三菱商事復興支援財団の活動をお話しさせていただきました。私どもが行っている支援は極めて小さな規模ではありますが、支援先の企業の皆さんが元気になり、また、当財団からの奨学金を受けた大学生が故郷の復興のために働き、支援先のNPO等がコミュニティの復興に取り組んでいく、その動きが少しずつ広がっていくということで、被災地の産業復興、雇用創出につながってほしいと考えております。

最後に、私どもが奨学金を給付した陸前高田出身の学生の作文を紹介させていただきます。

<自分でもどうしていいかわかりませんが、陸前高田のことが大好きです。だから、震

災後、仕事がないと言って人がいなくなっている現状が悔しいです。私は故郷を離れて大学に通学していますが、将来、地元に戻り、何らかの形でまちの復興に貢献していきたいです。>

「ともに、前へ、ともに、明日へ」、これが私どもの財団の基本であります。地元のニーズに迅速に応え、そして、息の長い継続的な支援をこれからも行ってまいりたいと考えております。

御清聴ありがとうございました。

○堀田 ありがとうございました。鍋島さん、素敵な活動ですね。このパワーポイントも感動的だし。現在支援されている8カ所ですか、陸前高田とか石巻が元気に頑張っておられる状況を御覧になって、どんな気分ですか。

○鍋島 地域によって、もともと規模の大きな産業があった地域というのはやはり立ち直りが非常に早い。これは例えば仙台市もそうでありまして、それから、石巻も早い。やはり民間の活力というものがその復興全体に対しての大きな力になっていると思います。

ところが、片方で、陸前高田とか、あるいは南三陸に参りますと、まだ地域の中心部が壊滅的な被害を受けた影響がそのまま残っている。やはり地元の産業を何とか復興させなければいけないと思い、先ほど水産業のお話等々申し上げたわけですが、この部分の後押しをしたいと考えます。私どもの支援は小さい規模ですが、皆様大変元気になっておられる。それが非常に周りの方々に伝播してきているなという思いを非常に強く感じます。

○堀田 例えば陸前高田にもうすぐホテルが開業する。あの辺には全く泊まる場所がないですからね。うちがやっているんだという感覚があるのではないですか。

○鍋島 冒頭に申し上げましたように、今一番大切なのは、被災地の復興をどうやって進めるかということですが、陸前高田は、本当に泊まる場所がないので、復興に従事されている方々も、一関に泊まって、そこから陸前高田に行かなければならず、往復2時間ぐらいかけている。非常にこの部分が障害になっています。こういうものをつくることによって復興も本当に進むことになると思います。又、ちょうど震災から2年経ちますが、亡くなられた方を弔うために、皆さんと一緒に集まる場もないというのがやはり現状です。このホテルというのは、宿泊施設というだけでなく、コミュニティの中心として、まちの大事なシンボルになってくのではないかと考えます。

○堀田 そういう非常に大事なことを三菱がやっているのだという自負やプライドからすれば支援額は安いものではないですか。

○鍋島 昨年、一昨年の震災の後で、我々も、この震災の状況というのを目の当たりにして、やはり企業としてできることは精いっぱいやろうと考え、我々ができる部分で貢献していきたいと非常に強く思いました。先ほど御紹介したボランティア派遣も、社員の間から、自然発生的に声があがり、4月の中旬から開始しました。本来の意味で言うと、ボランティアからは少し外れたところになりますけれども、あの時点では泊まる場所も、ある

いは交通手段もなかなか無かった中、毎日毎日継続してボランティアを送っていくことは現地のNPOの方々にも大変感謝されました。とにかく毎日来るということで、受け入れる方もしっかりと予定が立ち、ボランティア活動の継続的な運営に役立ったとの声を頂きました。復興支援活動を継続していくことが我々自身のこの社会における大きな責任だろうと考えて取り組んでおります。

## 【事例紹介2】

○堀田 お待たせしました。油井さん、この三菱商事さんからの資金で現に頑張っておられるわけですかね。こういう活動を現にしていますというお話です。お願いします。

○油井 SWEET TREAT311の油井と申します。よろしくお願ひいたします。

まず、私からは、私どもSWEET TREAT311というのは、震災後に、私の友人で、今、代表をしています立花という者の実家が仙台にありまして、沿岸部に実家があったということで御両親を助けに行ったというのがきっかけで発足した、本当に友人同士が集まって立ち上げた団体になっています。昨年の11月に認定をいただきまして、公益社団法人ということで活動させていただいております。

ちょっとパワーポイントを見ていただきます。私どもは、石巻の雄勝という、半島の東端、沿岸部のまちで活動をさせていただいております。

これが石巻雄勝町という町の最近の写真ですね。これは、朝、漁師さんと一緒に撮った写真ですけれども、ちょうど朝日が出てくるときの写真ですね。非常にきれいなまちです。典型的なリアス式の町で、光が出てくるあたりがちょうど太平洋ですね。リアス式の内海で、カキ、ホタテ、ホヤ、銀ザケなどを養殖しているという町になっています。

我々、震災直後は石巻を中心に炊き出しを毎日のようにやっております、大体10万食ぐらい、当時の避難所、石巻市を中心に、男鹿半島であるとか女川のほうにも回っております。その中で、この雄勝の漁師さんに我々呼ばれて、炊き出しに来てほしいという要請があって、雄勝町にたどり着いて、現在はこちらで教育の支援活動、地元の小・中学生を中心に教育のお手伝いをさせていただいており、先ほど堀田さんからもお話がありましたけれども、私ども、三菱商事復興支援財団さんからも基金をいただきながら活動を続けているNPOのような団体の一団体とお考えいただければと思っております。

改めて雄勝町ですね。石巻市内から車で1時間ほどかかりますが、北上川から、生徒の7割が犠牲になった大川小学校という学校の山の向こう側になります。女川町のちょっと北に位置しております。震源地から最も近いまちの一つと呼ばれておまして、右側の地図を見ていただくとわかると思うのですが、リアス式の海岸になっている分、津波がこの湾の中に入ったときに高さが非常に増して、津波が大体20メートルぐらいの高さになったと漁師さんたちから聞いております。

主な産業としてはやはり漁業ですね。先ほど申し上げた養殖業中心に、あと、硯。御存じの方いらっしゃると思いますが、日本で一番硯がとれているまちの一つになります。東

京駅、最近、リニューアルしましたけれども、東京駅のあのスレートはこの雄勝の硯を使っております。

人口のほうも4,000人ほどになりまして、震災後は1,300人。これは住民票の登録数なので、実際もう少し少ないのではないかと思うのですが、今、1,000人ほどの方が、現地にはほとんど住んでいませんので、仮設暮らしで、隣のまちに移転しているという状況になっております。

学校のほうは小・中学校合わせて5校ありまして、そのうちの3校は完全に津波で流されてしまったというような状況になっております。生徒数に関しては、今、115名という子どもたちが、もともとこの雄勝にはいたということになっております。

これが震災前の雄勝ですね。一応田舎らしい商店街があって、信号が1つしかないという非常に小さいコンパクトなまちで、私も震災前は訪れたことありませんでしたけれども、地元の方のお話では、非常に温かな、小さなコミュニティがしっかりとここにはあったという話を聞いております。

こちらが雄勝中学校になります。先ほど見ていただいた地図のちょうど湾の一番奥に位置する、海沿いにあった学校ですけれども、この次の写真をお願いできますか。

現状はこういった形になっております。ちょっとわかりづらいのですが、奥の大きな横長の建物が雄勝中学校になっております。先ほど申し上げましたように、津波が20メートルということで、家屋は全部流されましたし、学校も、屋上まで波をかぶったと。今残っている建物がこの中学校と小学校、あと真ん中にあるのが硯の会館ですね。硯の博物館のような建物だけが今残っているという現状です。

我々、ここに炊き出しに行つてまず最初に会ったのが、その漁師さんと、あとは雄勝中学校の校長先生になりまして、テレビ、メディアの報道でもお聞きかもしれませんが、雄勝町でこの校長先生は、震災によってこれだけ不幸な目に遭った子どもたちこそ日本で一番豊かな教育を提供したいのだということで、瓦れきのタイヤを生徒に拾わせて、そこにビニールテープを張って、復興の和太鼓ということで、それを総合学習の一環として授業で取り組むという活動を始められております。

我々、その佐藤校長先生と意気投合してといたしますか、我々のような団体も積極的に受け入れて、学校のため、子どもたちのために活動してほしいという御依頼のもとに、まず最初、学校の給食の炊き出し、震災直後、5月ぐらいから炊き出しを始めましたが、まだパンと牛乳のみの給食が毎日続いておりましたし、避難所では、おにぎりですとかお弁当くらいしか食事の提供がなかったものですから、給食の炊き出しを始めて、そのうちに、エンジン01という文化人の団体さんがいらっしゃるのですが、そちらの藤原和博さんとか林真理子さん、作曲家の三枝成彰さんなどと一緒に出前授業を現地でいう活動しながら、それがだんだん夏休みは夏期講習に変わっていったり、冬休みには受験を控える中三の生徒たちに進学塾の先生とともに学習指導、進学をサポートをしたりといった形で、物資支援というフェーズから、学習支援、教育の支援のほうに姿を変えていく、活動の内

容を変えていくという形になり、現在があるといった状況になっております。

これは雄勝中学校ですね。震災直後、3カ月ぐらいですかね。学校は残っているのですが、瓦れきだらけです。生徒は幸い、卒業式の後で、全員下校して、避難訓練がしっかりしていたこともあって、地震があったら山に登るということで、全員無事でした。

これが先ほど申し上げた出前授業です。作家の藤原和博さん。以前、杉並区に和田中学校の校長先生を民間で初めておやりになられた先生ですね。

こちらが先ほどの和太鼓の様子です。これはまさに東京駅で、雄勝のスレート石を使ってリニューアルされるということで、東京駅の駅長さんが文科省と一緒に子どもたちを招待して、たたいてもらったときの様子ですね。

写真、下のほうの太鼓がタイヤにビニールテープ張っているのをごらんいただけるかと思えます。

これを機にかなり注目が集まって、震災が起こった年の夏休みにはドイツのほうに招待されて、ドイツ国内ツアーを実施したり、翌年、去年の夏休みには韓国でツアーをするなど、すっかり、芸能人ではないですけども、そこら中から引っ張りだこで、ある意味、震災を機に、みんな家を流され、御家族を失ったりと不幸な目に遭っているのですけれども、その分何か新しいきっかけができて、それこそ震災がなかったらこういっただろうなという声は、生徒を初め学校関係者、保護者からもよく聞かれます。

私ども、現在活動させていただいている内容としましては、雄勝アカデミーという寺子屋のようなものを現地に開設して2つの活動をさせていただいております。まず1つが学習支援ですね。先ほどから申し上げております雄勝中学校の生徒に対する学習支援。宿題のお手伝いをしたり、受験の指導をしたり、まだまだ仮設住宅に住んでいる子がほとんどなものですから、なかなか家で勉強できない、落ちつかないという子どもたちの居場所という位置づけも兼ねて学習支援を、これは被災された地元の塾講師と一緒に日々行っております。

もう一つが、体験プログラムとしまして、先ほどごらんいただいた雄勝は非常に自然が美しいまちですので、日本らしい山と海がつながる自然を生かした漁業、農業、林業といった一次産業の体験を始め、そういったところで作られた、とられた食材を使った料理体験とか、また、こういった硯石を使った伝統工芸体験。また、石巻は余り知られてないのですが、IT教育が震災前から非常に盛んなまちであります。我々の活動によってそういったことを地元の小・中学生に展開していくべく、こうしたことを地元の住民であったり、東京から専門家の方をお呼びして日々子どもたちにこうしたことを提供しているということで、何か教育を通じて子どもたちにたくましくなっていて、それが地域の復興につながっていくことを目指して活動させていただいております。

これは、放課後塾ですね。アフター・スクールという名で、御覧いただけますでしょうか。仮設の集会所を活用して、ほぼ毎日、現在では、雄勝中学校、雄勝小学校、あとは、北上川沿いにあります北上中学校というところでも行っております。

これは、ウインタースクール。これは、今年の冬、12月からやっております。写真に写っているのは、ベネッセコーポレーションの方々がボランティアでお越しいただいて、宮城県向けの受験指導を、ある意味、カスタマイズで雄勝中学生のために計画していただいて実際に指導していただくということを、3カ月間かけて、12月から今ちょうどやっているとところになります。毎月来ていただくといっても、頻度は月に1回ですので、平日などはこういった、eラーニングではないですけれども、映像を通じて東京と石巻を結んで子どもたちの指導をするということもさせていただいております。

これは、漁業体験ですね。これはワカメの漁に子どもたちを連れて行って、実際にワカメがどうやって養殖されるのかといったところから、漁師さんというのはふだんどうい生活をしていて、どういう形でその仕事で生きているのかという、キャリア教育的なことも含めて、これは地元の学校の総合学習の一環で取り組ませていただいております。

これは、同じく農業体験ですね。これも地元の農家さんと提携しまして、農業は通年でできますので、季節にあわせた野菜を、子どもたちが土づくりから、収穫して、最終的には料理をするといったところまで、学校の総合学習の中で御一緒させていただいております。

ITに関しては、これは年代にもよるのですが、最近一番盛んに行っているのはこのITキャンプといったもので、週末、子どもたちを我々の寺子屋に呼んで、そこに宿泊してもらいながら、iPhoneやiPadといったデジタルツールを子どもたちに1人1台ずつ持たせて、その2日間の記録を自分たちで撮ってごらんと。雄勝に来れば、自分たちの昔から住んでいたなじみのあるまちが消滅してしまっていて、唯一残っていた学校も、ちょうど先週から取り壊しが始まっておりますので、本当に消えゆくまちを未来のために残してみようではないかというような話で、それぞれが記録をして、最終的には3分の動画にそれぞれが編集して発表するといったようなデジタルドキュメンテーションのワークショップも最近頻繁に行っております。

これは、編集の模様ですね。これは東京からビジュアルアーティストのてつろうさんという方をお呼びして、こういったワークショップ、東京でやっていらっしゃるのですが、もともときっかけが、震災の日に東京で仕事をしていて、何げなく生活している一日が、振り返ってみると、人生の中で最も記憶に残るといふか、思い出になる一日になるかもしれないということに震災を機に気づいて、実際にそれを子どもたちと一緒に3分の動画におさめてみようではないかというワークショップを東京でやられているのを、最近、石巻で子どもたちに御一緒しているという状況ですね。

まとめになりますが、雄勝アカデミー、寺子屋ではあるのですが、山とか、その下にある田畑、そして、田畑につながる海、こういった豊かな自然を生かして、子どもたちにさまざまな学びを地元の方々と提供できればということを目指しております。

先ほど全体の雄勝アカデミーの御説明をしたときに、ちょっと触れなかったのですが、まずは地元の子供たちがこういった経験を通じて生きる力を育て、復興を担う人材になればいいなど。先ほど三菱商事さんからもお話ありましたが、地元の子供たち

も復興に携わりたいという気持ちは非常に強いですから、それが具体化するようなサポートを我々していければなど。

こういったプログラムが現地の方々に定着すれば、それが観光資源のような形で、学校の教育旅行なのか、または企業の研修なのか、そういった形で雄勝に外から人が入ってくるといったことも十分可能性があると思っておりますので、まずは教育を通じて地域の地域を新しくしていくということをお手伝いさせていただきながら、最終的にはそれがまちの復興、新生につながっていけばいいなと思っております。

最後に、ちょうど先々週、子どもたちとITキャンプをやった動画をお持ちしましたので、映像を見ていただくと、より雄勝の状況であるとか地元の子どもの様子が見えますので、3分ほどの短い動画になっておりますので、そちらをちょっと見ていただければと思います。

#### (動画上映)

これが我々の寺子屋ですね。左は、よく田舎にある、昭和にできた一軒家で子どもたちを受け入れて、こういった海岸も雄勝はありますので、こういったところに子どもたちを連れて行って、ちょっとわかりづらいのですが、みんなiPhone持って、遊んでいるようですけれども、いろいろ記録はしているという形ですね。

あとは、森林公園、山の中に公園もありまして、一部、動物園がまだ残っていて、鹿がいたりするところに行ったり。これが消防署ですかね。

地方の子どもなので、iPhoneを使ったことないとか携帯持ってないという子どもがほとんどなので、こういったものに慣れてないのですが、やはり子どもたちの柔軟性が高いとか、好奇心が旺盛ですので、機材を使うことに関してはすぐ受け入れますね。

そこから、物事を記録するとか、物を見る視点とか、あとは、それを基本的に人に伝えるために撮影してもらうのだよということはきちんと説明しておりますので、どういう映像を撮ったら今の雄勝のことをいろんな方に知っていただくかということは子どもなりに意識しながらやっています。

この子は漁師の娘さんなのですけれども、そんな意識はしてないのですが、そういった漁師の子どもであればあるほど、やはり海を意識して撮っているということは、我々見ても感じますね。

漁師さんに協力いただいて漁船を出していただいて、船に乗ってちょっと沖に出て撮影するといったこともしました。まさに山から海まで一日かけてみんなで回って撮影するというような活動をちょうど先々週行っております。

これが編集の模様です。それぞれが撮った映像を振り返りながら、どういう順番でどれぐらいの長さを使うかといったことも含めて、構成をちょっと書いてもらって、それを実際に大人のスタッフと一緒にコンピュータを使って編集していく。15人ぐらい参加したのですけれども、3時間ぐらいあれば15人が編集し終わるぐらい、大人よりも、変な話、スピーディに物事を決めていきますし、子どもは侮れないというか、大人以上の能力をこう

いった場では発揮するのだなというのは改めて感じました。

実は、昨日、発表になったのですが、ドイツで行われているベルリン国際映画祭が今年3月の末に、サテライト上映という形で仙台でも行われることが決定しまして、私どもも協力団体として協力させていただいているものですから、先ほどの雄勝中学校の太鼓のパフォーマンスであるとか、あとはこのITキャンプの映像も、今、大人が撮った映像をちょっと御紹介したのですが、子ども自身がまとめた映像をこの映画祭でも上映するべく、今、主催者の方々とお話をしておりますので、今後も、先ほど申し上げた震災を機に何か新しいきっかけができるということが非常に現地の子どもたちにとっては大事だと思っておりますし、それが将来、子どもたちが、郷土愛を育て、地元のために何かしたいという思いを強く持って、この雄勝のために活動、生きていってもらえればということを目指して、引き続き現地の方々に寄り添いながら活動を続けていければと思っております。

私からは以上です。

○堀田 ありがとうございます。すばらしい活動です。

油井さんには隣の三菱商事さんのところからの助成金で活動されているということで並んでいただいているようですけれども、助成金はどれぐらい役に立っていますか。

○油井 はい。御承知のとおり、我々、事業というものはやっておりませんので、日々の収入がないということで、例えば先ほどの活動であれば、子どもたちに使ってもらえる機材が必要だとか、また、漁業体験、農業体験やっただく上で、地元の漁師さん、農家さんにボランティアでやっていただくこともできるのですが、皆様も実際に被災されているわけですし、仕事がなく困っているといったところで、講師料としてお支払いしたりというような形で活用させていただいております。

○堀田 すばらしい活動に助成金が十分生かされているということですね。子どもたちとやっていたら、楽しいでしょう。私どもの財団も雄勝に入って活動していますが、子どもたちはとっても素直だし、知らない人にも挨拶をきちんとするしね。東京の子と違うとは言いませんけれども、本当に皆さん、入っている方、元気元気でやっておられるのではないですか。

○油井 そうですね。あと、雄勝は漁師の会社でオーガッツという会社が非常に取り上げられて有名だと思いますが、非常に前向きで温かい方が多いというのが、我々も最初に雄勝に入ったときの印象としてはありますね。

○堀田 そうですね。学習支援はいろんな団体が入っていて、NPOの人たちも結構入っているし、任意団体等のグループで入っているところも多いのですけれども、連携しておられますか。この地域はそっちでやってくれるなら、うちはこっちをやるよとか、そういうネットワークはないですか。

○油井 緩い連携というものはありますが、講師を共有するとかそういったところまでの連携というのは、やはり距離的な問題で、女川にはカタリバさんという大きなNPOが入られてずっとやっついていらっしゃいますけれども、雄勝、女川、近いとはいっても30分以上かか

るとか、あとは、それぞれが地元の方々と一緒にやっているという部分がありますので、情報の共有などはしておりますけれども。

○堀田 情報の共有があればまたいい形で進むのかなと思いますね。でも、あそこに入っている団体で公益法人ってあなたのところだけではないですか。

○油井 そうですね。正直、皆さんも、なぜ我々のようなこういう団体がここにいるのだろうとちょっと疑問に感じていらっしゃるかもしれませんが、公益法人で現地で草の根活動しているという団体は余り聞かないですね。

#### 【ヤマトホールディングス（株）の取組み】

○堀田 その点はまた後でやりましょう。ありがとうございました。

木川さんは、今のお二方のお話を聞いておられて、うちもやっているぞと燃えてきたのではないかと思います。木川さんのところ、こヤマトホールディングスさんは、一配達10円ですか、寄附を集められて現地でいろんな活動をされています。そういう活動は知っているよ、聞いているよという方、ちょっと手を挙げていただけますでしょうか。

すごいですね。多数ですよ。これだけ御存じですので、要点をお話いただければうれしいと思います。

○木川 ヤマトホールディングスの木川でございます。よろしく申し上げます。

写真も含めて資料を用意してきましたので、ご説明させていただきます。

まず最初に、復興支援活動で、3つの取組みを同時に行ないました。

まず1つ目ですが、現地で救援物資輸送協力を行ないました。これは、我々が会社として取り組む前から、大震災発生の数日後に現地の社員が自発的に被災地各地で始めた活動です。この話を後で私は知り、それで直ちに会社全体の活動とし、3月23日から救援物資輸送協力隊として、車両200台、人員500名を投入して活動を始めました。

救援物資が完全に滞っていましたので、そこを解消しないといけない。最大のポイントは、物を運ぶという以前に、仕分け、整理すること。それができないと、救援物資は配れない、あるいは食料品であれば腐ってしまうという状況でしたので、そこに我々が参画させていただきました。これが昨年1月15日まで継続した活動です。

2つ目が、先ほど堀田さんからご紹介があった「宅急便ひとつに、希望をひとつ入れて」というメッセージで、宅急便1個について10円の寄付を1年間継続した活動です。

今回のテーマである公益財団法人としての枠組みをこの中に当て嵌めたわけですが、結果として、142億円を超える寄付をさせていただきました。

当社は決して莫大な利益をあげている会社ではないので、この金額は、私どもの年間純利益の約4割に相当します。これは一企業が出せるぎりぎりの金額ではないかと思います。外国の著名な経営者から、褒め言葉だったのだろうと思うのですが、You are crazyと言われました。寄付先を農業、水産業、生活基盤とし、助成先を限定しましたが、実現に至るまでは大変苦労しました。その点を後でお話します。

それから、3つ目が社員によるボランティア活動等の支援です。この3つのアクションを同時に行ないました。

自衛隊と一緒に救援物資輸送協力をさせていただいた写真です。これは気仙沼ですが、市長の英断で、我々の指揮下に自衛隊に入らせていただいたという唯一の例です。これによって、この町だけ御用聞きができました。具体的には、長靴なら一足何センチのものといった具合に、段ボール箱単位で運ぶのではなくて、必要なものだけ仕分けして、運ばせていただいたという事例です。

これが救援物資輸送協力隊を立ち上げた初日の南三陸の写真です。真ん中に走っているのは、救援物資を運んでいる当社の集配車です。

地元到我々の集配車が入っていったときに、被災者の方々から手を振っていただいている姿です。

宅急便の荷物に書き込みがかなりありました。ここで我々が痛感したのは、我々は単に荷物を運んでいるだけではなくて、送られた人の気持ちが荷物と一緒に届くということです。被災者の方から喜んでいただいたと同時に、荷物が届くということを通じて、社会から隔絶感、分断されていたのがつながった、その喜びが非常に大きかったのだ、と後から聞きました。

これが2番目の寄付活動です。この活動を決めたのが3月31日の夜で、翌日4月1日、新年度の初日に、本社で幹部社員集めて、私がこの構想を話しました。そして、みんなの賛同を得て、7日に对外発表しました。しかしながら、そのタイミングで、一体これにどれだけの税金がかかるかは全くわからない。まして、その活動を発表した瞬間に、外国の機関投資家から、株主代表訴訟の検討はされましたか、と聞かれました。年間純利益の4割も寄付して、投資家にどう説明するのですかという質問がありました。

私はその場で、やるならどうぞ、受けて立ちますと申し上げる以外になかった。実際に企業がある程度の規模の金額で寄付しようとしたときに、今の税制は非常に厳しい。もちろん、全額無税というのは、私の頭の中にも100%はなかったのですが、非課税の金額は最大限でも二十数億円、これが限界です、というのが最初のお答えでした。そうすると、寄付する金額のかなりの部分が税金になります。そうすると、私どもがやりたい、一円残らず被災地へ寄付するということができません。残されている手段は、日本赤十字に寄付するか、あるいは国とか地方自治体に直接寄付するかになります。

しかしながら、それではどこに使われたかがわからない。私たちが差し上げたいところに寄付される保証もない。したがって、極力無税枠を拡大していただくしかないということで財務省との協議を始めたのですが、その過程で、今日ここにいらっしゃる公益認定等委員会の池田委員長に大変助けていただきました。

公益財団法人として、私どもはヤマト福祉財団を持っています。これは障がい者の自立支援のために設立されている財団でありまして、寄付は財団の活動に入っておりません。したがって、1年間の寄付活動を加えるということを経営で認定いただいて、そして、本

当に早いタイミングから真剣に、どうすればできるかというのを財務省にも考えていただきました。1カ月半かかりましたが、財団を経由して全額無税の枠組みを実現するというのでつくり上げることができました。

指定寄附金に指定されたことで、日本赤十字と同じステータスを一企業の活動にいただき、これは大変ありがたかったです。日本ではなかなか、民間企業、多額の寄付をするというのが難しいという現状に一石を投じることができたのかも知れません。

寄付先の選考姿勢としては、これは当社が決めるのではなくて、第三者委員会をつくって、当社の利害とは無関係に助成先を決めました。寄付先は計31件、142億6,600万円になりました。

1件あたりはかなりの金額としてお渡ししたのですが、コンセプトは、見える支援、速い支援、雇用創出等の効果が高い支援ということ。水産業、漁業、農業、そして、地域の公的な施設、学校とか病院等、これらに限定して寄付する、これは固く決意して選んでいただきました。

その事例を2つ見ていただきます。

これは南三陸町の仮設の魚市場。南三陸町は、秋鮭の水揚げでは有数の地ですが、完全に市場が流されていました。製氷設備もほとんどない。そういう状況で、初競りの日がどんどん近づいてきます。国に助成を求められたのですが、仮設ということで優先順位が下がる。常設でないということでなかなか資金が集まらない。我々はその間に助成させていただき、初競りにぎりぎり間に合うタイミングで稼働がスタートしました。

これは岩手県野田村の保育園なのですが、園児94名が全員無事に高台に避難したということでメディアでも報道されていましたが、この保育園再興のための資金を国に求めたのですが、ゼロ査定でした。理由は、そのエリア全体の青写真がまだ書けてないところに一事業にだけ国の税金は使えないという論理でした。したがって、我々、これを全額補助させていただき、昨年10月30日に竣工しました。

このように、国ができない、時間がかかり過ぎてできない、そういう助成先を選んで、私どもの価値観で必要なところにお渡しをしたということでもあります。

さて、こういう活動は、CSRとして1年間やるにはいいのですけれども、当社では約3割が外国人株主ですから、彼らの目から見て2年間これを継続したら、さすがに理解されなくなってしまう。社員も、それだけやるのだったら給料上げてくれという声は出てくるかもしれない。したがって、この活動をこのままの形で継続するわけにいかない。でも、やはり我々は、この震災を通じて我々が社会インフラになっているということは確認できたし、我々の業務を通じて、いろんな地元の方々からの声というのが伝わってきました。そこで、こういう地域支援活動をどうやって永続的にやるかというのを考え始めました。

「プロジェクトG」というのは私が名付けた名称ですが、Gというのはガバメントです。地方自治体を中心としたガバメントに対するプロジェクトということです。

幹部社員に説明するために、私自身が書いたコンセプトマップですが、当社は社会イン

フラになっており、国内外のネットワークの中には全国約18万人の社員も含まれます。被災エリアだけでも1万人の社員がいます。それと同時に、我々、経営資源として、IT、ロジスティックステクノロジー、ファイナンシャルテクノロジーを持っています。これらを地域社会に開放して、そこに同業者も含めた民間企業、行政、住民、生産者、NPO等に乗ってもらおうと考えています。

当社は長期計画の中で生涯生活支援というコンセプトを掲げています。従来型のCSRはある意味で「施し」であり、これを求められ続けると、途中で挫折するかも知れません。かといって、何もやらないのではなくて、新しい考え方は、我々が本業を通じて社会に貢献し、そこで多大な利益を求めない。そのために、我々の事業基盤を開放しようではないかというコンセプトです。

一つの事例だけちょっと見て、話を終わりたいと思います。

これは岩手県で、震災前に実験を始めた考え方で、私ども、サービス名としては、「まごころ宅急便」と名づけたのですけれども、岩手県の山間部にある西和賀という地域で、ひとり暮らしのご老人に買い物支援を提供すると同時に、お届けのタイミングで、健康状態や安否確認を同時に行うというサービスです。

当社は社会福祉協議会と連携をとりながら、荷物を届けると同時に安否確認を行ない、情報としてフィードバックします。このようなトライアルを始めて、被災地である岩手県をはじめとしてこのサービスが広がっています。

行政サービスの領域に事業と一体化する形で地元と共有できる価値を見出そうという、ハーバードのマイケル・ポーター先生で言うと、CSVという考え方に基づいた活動を今後さらに進めていこうと考えています。

○堀田 ありがとうございます。余り活動がすばらしいので、うっとりしておられたのかと思いますが、この後、トライアル、ぜひぜひ頑張って、プラットフォームつくってほしいと思います。ほかの同業他社いっぱいいるではないですか。誘い込まれないのですか。

○木川 当然お声をかけています。地元の同業者はぜひ乗ってくださいと。彼らを蹴出して我々がやると地元の貢献にはなりません。その辺は一人占めをしないというのがポイントだと思います。

○堀田 頑張って、ネットワークもつくってやってほしいと思います。

もう一つだけ、鍋島さんのほうから提起された問題で、木川さんのところの活動、本当にすごく皆さんにポピュラリティがあるのですね。どのようにして広報されたのか、そのところをもう時間がありませんので、ごく手短かに。

○木川 積極的にアピールしたというつもりはないのですが、当社の事業は地域に完全に密着しています。それと、常に姿が見える、物を運ぶ車が動いている。この差があるのかなと思います。

○堀田 ありがとうございます。三菱商事さんも、社員のみなさんが黄色いベストを着て、2,000の方が現地に入っているのですから、姿が見えていますね。ああいうところか

らどんどんまた広がっていけばいいなあとと思います。

【（一財）CSOネットワークの取組み】

○堀田 あと25分しかないのですね。黒田さんは、幸い、パワーポイントがありませんので、ここまで話さなければというのではないと思います。ということで、骨子をお話しただけであればうれしいと思いますが。

○黒田 改めまして、一般財団法人CSOネットワークの黒田と申します。どうぞよろしくお願いたします。では、5分ぐらいお時間いただいてもよろしいでしょうか。

簡単に私どもの団体のことを申し上げますと、1999年につくられた団体で、当時はCSO連絡会と言っておりました。日米の枠組みの中で、政府とか企業、あと、市民セクターという言い方をしておりましたけれども、そういった異なるセクターが手を携えて、世界の問題、例えば教育、保健、人道支援、環境、ほかにもたくさんございますけれども、そういった問題に取り組んでいこうということでできた団体でございます。その後、改組しましたけれども、そういった世界のいろいろな問題、貧困とかそういった問題を解決するなかで、企業の役割というのがどんどん増しているということに改めて気づきまして、その後は、どちらかという企業に活動に注目させていただいております。

現在も、企業の社会的責任、最近ではあらゆる組織の社会的責任の推進であったり、あとは、日本の企業の方々の途上国支援の調査などさせていただいたりしているのですが、震災後は、福島にずっとかかわってきておりますので、そのことを少しでもお話しさせていただきたいと思っております。

福島にかかわるきっかけになったのは、私たちの年齢が、福島に行っても、震災直後であっても、もう問題ないだろうというのももちろんあったのですが、気持ちとして福島にかかわりたいという思いが強くなってございまして、とにかくまず現場に行ってみようということで、4月に現地に入りました。その後、海外の外資系の食品関係の企業が、特に酪農関係で何か支援したいので調査をしてほしいということで、最初に日本NPOセンターのほうに話があり、私たちもそこに参加する形で、アセスメントを実施しました。福島の、特に県の酪農組合協会などに何度も足を運び、また、その関連で有機農業者とか、これまで全くお付き合いなかった方たちとおつき合いを始めさせていただきました。

酪農のほうに関しては、今、福島市の松川というところにミネロ牧場という復興牧場ができました。そこには浪江と飯館から、避難せざるを得なかった、そして、酪農を断念せざるを得なかった方が共同経営という形で酪農を再開していらっしゃいます。

また、少し申し上げましたけれども、有機農業者とのつながりがかなり深くなっております。もともと任意団体で福島県有機農業ネットワークというネットワークがありますが、そのNPO法人化のお手伝いや、海外の支援金の情報提供などお手伝いするようになりました。まず現場に行きたいということもあり、何度も現場に通わせていただきました。まずはその状況を知ること、それを県外に伝えていくということがすごく重要だと思っております。

した。

最初は中通りが中心だったのですけれども、昨年からは、会津や南相馬などの浜通りにも行っております。そういった中で、そこにいる福島の特に農業関係の方が、首都圏ともっと交流したい、福島の状況を多くの人に伝えたいし多くの人にも来ていただきたいとおっしゃるのを聞いて、自分たちは福島に足を運ぶだけではなく、東京にいてできることもたくさんあるのではないかとだんだん思うようになってきました。

福島の農業生産者の中にもいろいろ横のネットワークがあります。例えば福島県有機農業ネットワークは、浪江から二本松に避難している方たちと交流をしています。福島市のほうでは絆ファームという、浪江の方が農地を借りて畑をやっていますが、その野菜を東京に持ってきて売ってお手伝いもしています。荒川区では、荒川区長さんの非常に強い思いもありまして、毎週水曜日、お昼ごろに、区役所敷地内で福島の野菜を売っています。野菜だけでなく加工品も売っています。去年は高速道路が無料だったということもあるのですが、今年になってから、物を運ぶのに非常に大きなコストがかかるようになりました。ヤマトホールディングスさんをお願いしたところ、宅急便を安くしていただき、大変お世話になったと聞いております。

弊財団は、福島県有機農業ネットワークの東京連絡事務所のようなこともしており、東京側の支援者との会合も開いています。このネットワークではある企業の御支援をいただき、東京に常設店のようなものを開設する予定です。

そのようなことで、もうそろそろ話を終えますけれども、今回強く思うことのひとつに、やはりセクターを超えた連携というのが重要だということです。例えば農家の人たちにしても、地元の商店街とのおつき合いはもちろんあるのですけれども、大企業の方たちとつながるといことは、余りなかったようですし、あと、日ごろ海外で活動している多くのNPO、NGOや公益法人が、東北に入り、先ほど自衛隊の写真もありましたけれども、ふだんおつき合っていない人たち、たとえば災害ボランティアセンターの方たちとも連携をしました。それは非常に重要なことだと思いつつ同時に、ほかの地域においても重要なことではないだろうかと思っております。私たちは福島の非常に限られたところしか知らないわけですが、大変な状況ながらも地域づくりを皆さん連携しながらやっつけたいと思います。その時間はないのでお話しはできないのですけれども、日本のほかの地域もいろいろ疲弊していたり、過疎の問題とかありますので、そういったところにも発信していく、情報の流通をしていくことも必要だと考えます。

去年、ブラジルのリオデジャネイロで国連の持続可能な開発会議が開催されましたが、そこにも福島の農家の方お二人の参加をご支援させていただきました。福島の大変な状況だけでなく、その中にあってもいろいろな取り組みをしているということを発信するお手伝いをしました。今後も海外への発信も含めてこういったことを広く伝えることも含め、微力ながらお手伝いをしていきたいと思っております。

以上です。

○堀田 ありがとうございます。素敵な活動です。本当に時間がなくなっておめんなさいね。私の不手際です。黒田さんのところは、公益法人ではなくて、一般財団法人ですね。そういった、今おっしゃったような活動は公益活動ということでやっておられる。

○黒田 そうでございます。

○堀田 ありがとうございます。いい活動です。私どものさわやか福祉財団も、現地、9カ所に入っていますが、それ以外に、福島 of 県外避難者の方々のネットワークづくり、絆をつくって復興の意見をまとめるという作業をしております。例えば東京国際フォーラムで福島 of 県外避難者の会をやったり、あちこちで県外避難者の方に、集まっていただく会をやっているのですけれども、御存じいただいていたか。

○黒田 済みません。存じ上げてなくて、個人的には何人かの方を存じ上げていますけれども、ぜひ教えてください。

○堀田 本当に福島は、ほかの宮城、岩手と違って、復興までもう一段前の段階ですよ。帰れるか帰れないかもわからない非常に厳しい状況ですので、みんな連携して一緒にやらなければいけないと思います。

#### 【まとめ】

○堀田 ということで、あと10分ですね。議論する時間も、最後に私がまとめる時間もなくなりましたので、最後に1分ずつ、皆さんへのメッセージ、公益法人はもっともっと元気に、こんな活動もやれるよ、こんなに困っているよ、こうしようよというメッセージをそれぞれのお立場から発していただきたいと思います。その御発言をもって、締めといたしたい。

そうすると、あと5分余ってきますので、この5分を有効に使いたいと思うのですけれども、両宮委員長代理のお話にも出ておりました被災地の支援活動に関する委員長メッセージ、池田委員長、一昨年の平成23年3月31日震災から20日後にメッセージをお出しになっています。

さわりだけ読みますと、今回の大震災、官民間わず、国を挙げて緊急の対策、復旧・復興に向けて頑張らなければいけない事態だと。公益法人は、民間にあって、公益に貢献したいという志を持って設立された団体です。これは一般法人もそういう団体が多いと思います。そういう団体なのだから、ぜひともこれまで培ってこられた専門的知見や経験、財産を生かし、被災者支援や震災復興に役立つ活動や寄附などに資源を振り向けて取り組んでいただきたいと思います。委員長の本当に切々たる思いを込めてのメッセージであります。

このメッセージに私も大変感動したのですけれども、今日は、公益法人関係、あるいは一般法人関係の方が多くと思いますが、このメッセージ、御存じだった方、ちょっと手を挙げていただけますでしょうか。

挙がりますね。ありがとうございます。

○池田委員長 ありがたいことです。

○堀田 「ありがたいことです」という委員長からのお言葉です。ちょっと悪乗りしますが、このメッセージに感動して何かやったよというところがあれば、もう一度手を挙げていただけますでしょうか。ちょっと乗り過ぎかな。

ありますね。ありがとうございます。大きなきっかけになり、皆さん、活動された方、それぞれ本当にすばらしい活動だと思います。

4方、このメッセージ、もちろん御承知だったですよ。それで、こういうすばらしい活動が展開されております。

本当はさわやか福祉財団、私どもの財団も報告したかったのです。この時間はもうありません。私どもは、最初の2カ月は、全国の仲間と緊急の物資その他の支援で、その間に、行政、国に仕掛けまして、みんなが最後まで安心して暮らせる地域包括ケアのあるまちに復興しよう。ちょうどそういう方向に福祉が動いております。動いておる福祉の最先端をこの被災地で実現して、ソフトをハードに組み入れた、そういう復興にしよう。そういう支援をしようということで、国、各関係行政機関が全部了解し、予算もつける、法律もつくってくれる、そういう受け皿をしっかりと作りまして、9つの被災地、石巻とか大槌町であるとか選びまして、そこへ入りまして、行政にその目標を定めてもらう。それから、医療、福祉等々の関係者、事業者がそれを目指して復興する気持ちになる。そして、一番肝心なのは住民。住民の方々が、ほうっておくと古いまちしか思い浮かびません。これを理解してもらって、住民の方が一番、それいいよね、そういうふうにしたいよね、何とか頑張ろうよねというふうに、一番大きな反響です。その住民の方々の声をまとめて、地域地域に合った形でのソフトを組み入れたまちづくり、これを住民のほうからも提言し、それを行政がしっかりと組み入れた復興にすると、そういう活動を続けてきております。

なかなか道半ばであります。そういう住民のサイドに立った、市民にとって最も暮らしやすいまちを提言するというのも、平素からそういうまちづくりにかかわっておる公益法人としての被災地での重大な役割かなと思ってやっておりますけれども、残念ながら、同じような活動をしてくれる公益法人が見当たらない。学校法人、学者の先生方が結構賛同してくれて、各地でそちらとは協力しながらやっておりますが、もうちょっと、調査とかいろいろやっておられる公益法人も多いのだから、入ってほしいなという気持ちは強くあります。

そのようにして現地に入っておりますと、さっき油井さんからもありましたけれども、NPO法人にはよく出会う。実際に多いのは任意法人です。任意法人が50とするとNPO法人が25の割合で、その他、社会福祉法人とかいろんなところが入っておられて、営利法人ももちろん入っておられます。で、公益法人が2つか3つかなあという、残念ながらそういう感じなのです。

でも、ここの委員長の宣言にもありますように、専門的知見や経験、財産はもちろんですけれども、専門的知識、平素から調査研究しておられるではないですか。平素からいろ

いろ助成されて、いろんなノウハウもお持ちでしょう。被災地はあらゆる問題が出ておりますから、どんな知識だって役立つので、もっともっと役立ってほしいなというのが正直なところであります。

公益認定等委員会の資料を見ますと随分やっておられるのですけれども、さらにもっともっとという気持ち強い。ではどのようにして参加してもらえばいいのか、どういう活動、どう生かしてもらえばいいのか。どうぞ、現地に入られているお知恵で、こういう活動も欲しいよ、こういうこともできるんじゃない、そういうメッセージ、それぞれ頂戴いたしまして締めといたしたいと思います。

どなたから伺いましょうか。やはりこっちからということになりますか。鍋島さん、お願いします。

○鍋島 被災地の復興に向けては、産業復興、雇用の創出というのがやはり必須なことだと思います。ここの部分において、これまで地元の産業を支えてきた水産業であるとか農業であるとか、こういう産業の復活というのはやはりまず第一であらうと思っておりますので、これまで同様に、しっかりとこの地域のニーズを受けとめて、そして迅速に、そして継続的な活動、これをしっかりと続けてまいりたいと思っております。

○堀田 雇用創出の関係というのは本当に現地の最大の問題ですけれども、いろいろ支援しておられます。本当はもっとあっちもやりたい、もっとこっちもやりたいとお感じのところが多いのではないですか。

○鍋島 おっしゃるとおりでありまして、本当にまだまだ大変な状況でありますし、本当に被災地では非常時の状況が続いています。できることなら、全ての地域でこういう我々の活動をやっていきたいという思いでいっぱいなのです。ともかく、我々の中でできること、そういうものを一つずつしっかりやっっていこうというふうに進めてまいりたいと思います。

○堀田 ありがとうございます。民間側としても、まだまだやらなければいけないところあるよと、こういうメッセージであります。では、油井さん、お願いします。

○油井 私からは、子どもたちに携わっている身としては、今日いろいろお話の中でも、子どもたちも、地元に戻りたい、何とか復興に携わりたいという気持ち、非常に強いので、まだまだいろいろ心のケアが必要だったり長期的な問題もあるのですが、そういう子どもたち、実は大人よりも前向きで、何とかしたいという気持ちは強いのですが、どうしていいかわからないという状況の子たちが多いものですから、私、教育というのはもっと社会がかかわって子どもたちにきっかけを提供することだと思っていますので、公教育は公教育で大事ですけれども、もっと社会が子どもたちにできることというのはあるはずですし、被災地に関して言えば、非常に不幸な目には遭っているのですが、逆に新しいものを生み出すきっかけにもなる、これはチャンスだと思いますので、教育に関して、これだけ東京ですとたくさんの方が集まられて、いまだにその被災地のことを思って、何とか復興に携わろうという機運はあると思いますので、それぞれの方がそれぞれの立場で何

らかかかわっていただくことで、日本の教育も変わりますし、日本がこれから変わっていくきっかけにもなるのかなあとは思っております。

○堀田 ありがとうございます。子どもたちって一生懸命元気に笑顔で何とか頑張ってくれるのです。心に大きな傷を抱えていますし、寂しい。だから、支援に行くと本当にいい笑顔になってくれますよね。その支援が、女川のように頑張っているところもありますけれども、全体的には波が引きつつある。お兄ちゃん、お姉ちゃん、おじちゃん、おばちゃん、もっともっと子どもたち、求めています。そういう状態はこれから何年も、残念ながら、続きます。子どもたちが、そうでなくても過疎化している被災地から去らないように、こういう状況ではここには暮らせないと行って移っていく人たちがずっと増えている。そういうことに何とかならないように、子どもの支えもまだまだ求められているということですよね。油井さん、ありがとうございます。

木川さん。

○木川 今日のテーマは震災復興がメインですが、震災復興のみならず、今、日本が抱える大きな問題として、地域活性化、生活支援、福祉等、大変大きな問題があります。これをやるためには、官と民の力が結集することです。力を合わせないとできない状況にもなっています。そのつなぎ役として、公益法人のあり方というのが一番適しているのではないかと、これは確信を持っています。

したがって、民間企業が単独でやれる領域は限られていますが、民間企業としてこういう公益法人をできるだけいろんな問題意識でつくって、その公益法人が時の状況に応じて、定款を時には変えて、いろんなことをやれる自由度というのがもっともっと広がってくると、官と民の力の結集につながると思います。

○堀田 ありがとうございます。今の官と民とをつなぐのに最も適しているのは公益法人であると。本当に私もそれを実感いたします。公益法人は、委員長がおっしゃっており、知恵、経験知がある。そして、官のこともわかっている。この制度ができる前の公益法人と違って、官の規制を離れて自由に動ける、本当にNPOと同じような自由、志を生かすことができる、そういう立場に我々はなった。これを生かさないと手は本当はないと思います。まだまだ官と民をつなぐことができていない。被災地はやはり、民のほうは官、お上依存の空気がどうしてもまだまだ強くて、民の声を届けるというのが難しい。

特に女性の声として生活再建に関する意見がなかなか出てこない。そういうところをしっかりと民としてのノウハウや技能を使って引き出しながら、それをしっかりと官に届ける。官がわかるような言葉、官がわかるような仕組みに組みかえて提言するという、これも公益法人が最も適している役割だろうと思います。そういう分野でも、本当に多くの方の御参加を期待いたしております。

最後に、黒田さん。

○黒田 先ほどちょっと言いそびれてしまいましたが、私たちが何で福島にかかわっているかという一つの理由ですが、じつはあまり支援をしているという意識はありません。と

いうのは、実は関わることで、地域のお母さんたちだったり農家の人たちの地域力というか、そのそこ力に圧倒されるというか、そこからすごく元気をもたらしているのですね。そういった意味で私はすごく感謝しているということと、第一次産業というものを、ここでもう一度見直して、そういったものを中心にした地域づくりを地元の人たちを中心に、外とも連携をしながらつくっていくことは本当に重要だと思いますし、日本のほかの地域にとっても大切なことだろうと感じることが増えてきました。

今、官と民というお話がありましたけれども、そういった中で、公益法人というのは、現場と企業であったり、現場と行政であったり、また現場と日本社会というものをつなぐという意味でも非常に大きな役割を果たすことができるのではないかと考えております。

今回のことで、公益法人というのが、社会の中で新たに認知されたような気がいたします。さらに日本の地域を活性化していく上でも、公益法人の方には大いに期待したいと思っております。

○堀田 ありがとうございます。すばらしい御発言をいただきました。

黒田さんのところは、福島を支援しておられます。福島からの県外避難者が全国にいます。東京に7,000人いますし、いろんな地域に来ておられます。この方は、地域づくりどころではない。帰られるか帰られないかわからない。そして、浪江町なら浪江町の人がどこに住んでいるかもお互い同士わからない。全くまだベースができていない。それが現状であります。被災地に入らなくも、それぞれの地域で、こういった方々の絆をつくり、どのような地域にしていくのかについて、知識を提供し、主体はもちろん地域の方々が、夢を持ち頑張ってやれるように後ろから押していく、そういう方面でも公益法人のノウハウ、蓄積した知恵が発揮されれば、復興は少しは早くなるのかと心から願っております。

4名からすばらしい報告と知恵を頂戴いたしました。みんなで共有して頑張っていきたいと思っております。本当に拙い司会で恐縮でした。4名の方に拍手をお願いいたします。

※パネルディスカッションで使用したパワーポイントの資料については、当事者の意向により掲載しておりません。